



いまから約二〇〇年前の  
一七九七年、島じゅうに  
住むすべてのガリフナ五  
〇〇〇人ほどを八隻の船  
に乗せ、セントビンセン  
ト島から二九〇キロ離  
れたカリブ海の西の端  
中央アメリカ、ホンジュ  
ラス沖のロアタン島(当  
時ロアタン島はイギリス  
の流刑の島として使われ  
ていた)まで運び、当面  
の食料などとともにひと  
かたまりに置き去りにし  
た。こうして約一七〇年  
間におよんだ、ガリフナ  
のセントビンセント島で  
の時代が終わった。  
その後、ガリフナは中

央アメリカのカリブ海沿岸に点々と村をつく  
り、移り住んでいった。現在では、ホンジュ  
ラスを中心にグアテマラ、ベリーズのカリブ  
海沿岸におよそ三〇万人のガリフナが住んで  
いる。  
ガリフナは数奇な歴史のなか、一度も奴隷  
化されたことのない自由の民であり、西アフ  
リカの黒人とカリブの先住民インディオの混血  
である。その文化もまた西アフリカの黒人文  
化と、新石器文化であったカリブの先住民の  
ものを融合したものであり、さらにフランス  
をはじめイギリスやスペインなどヨーロッパ  
の影響も強く受けている。またかれらは独自  
の言語をもつ。それは南アメリカ大陸から渡  
ってきたカリブの先住民アラワク族の言語を  
もとに、カリブ族の言語、西アフリカの諸部族  
の言語、フランス語、英語、スペイン語の影  
響を受けている。  
ガリフナの男たちは丸太の舟に乗り、魚や  
エビ、カニ、貝をとる。そして、女性は畑でマ  
ニオクイモを栽培し、その粉からカッサベと  
よばれるせんべい状のものを焼く。ココナツ  
の果汁や果肉はスープやパン、菓子の素材と  
なり、バナナも料理用、生食用など種類も豊  
富で調理方法もおお。婚姻は一夫一妻で、  
土壁にヤシの葉葺きの屋根をもつ簡素な家に  
夫婦、子どもが家族が住む。村にはかならず  
仕立屋があり村びとの洋服をつくる。男性は  
ズボンにワイシャツ。女性はワンピースなど  
のスカート姿。そして頭にはスカーフを巻く  
ことがおおい。  
かれらのおおくはキリスト教カトリック信  
者であるが、それは西アフリカの黒人たちが、  
そしてカリブ海、セントビンセント島の先住  
民たちの土着信仰とを習合したものである。  
そしてことあるたびに響きわたる太鼓とと  
もに踊り明かすのだ。

リズムの多様性、  
美しく単純な旋律  
——音楽と踊り  
ガリフナの人たちにとって音楽と踊りは人生  
そのものである。日々の生活や仕事のなか、  
喜びや悲しみを歌と踊りに昇華させ、労働歌  
や子守歌を歌う。そしてさらに各種年中行事  
や冠婚葬祭、先祖への祈りなども独特な音楽  
と踊りとともにこなす。  
それらには死者を弔う「ブンタ(弔い)」。新  
たなる生をよぶ「クリオウ(欲情)」。日々の喜  
びと友情をあらわす「パラダ(喜び)」と「ウ  
ング・ウング(友情)」。民族の歴史を次世代に  
伝える「ワナラグア(戦い、仮面舞踏)」。優雅な  
おとなたちの娯楽「グンチエイ(社交舞踏)」、そ  
して、先祖を敬いその霊と魂の会話をする「ド  
ウグ(霊祭)」などがある。  
ガリフナ音楽全体の特徴としてリズムの多  
様性とその複雑さ、美しく単純な旋律とその  
果てしない繰り返し、集団の共通認識による  
協調性と即興による自由な展開などがあげら  
れる。  
ガリフナの音楽にはガラオンとよばれる高  
音と低音の二種類の太鼓、打楽器として亀甲、  
拍子木、マラカスとして吹奏用のホラガイな  
ど、アフリカを起源にすると思われる伝統的  
な楽器を基本とし、さらに横笛やサククス、そ  
してギターなどヨーロッパからもこまれた  
楽器を加えることもある。  
そしてその音楽もまた黒人たちがもつ強烈  
なリズムや独特な色彩感の発声による歌とと  
もに、ドレミファソラドという西洋音楽が  
もつ調性を有する。それらはガリフナが数奇  
な歴史のなかでフランスやイギリスの影響を  
強く受けていることに由来する。  
また長調より短調の曲のほうがおおい、歌

詞の内容は弔いや欲情など、その行事の意味  
にあまり関係していないことがおおい。ガリ  
フナたちにとって各種楽器演奏はもっぱら男  
たちの役割りとされている。  
太鼓ガラオンは高音と低音のそれぞれがあ  
り、一対で演奏される。高音ガラオンは即興  
ソロと基本リズムを担当する。ときにはふた  
つの高音ガラオンが、即興ソロと基本リズム  
を掛け合いて交代しながら演奏を進めること  
もある。また低音ガラオンは基本音にアクセ  
ントをつけ、リズム全体をひきしめる役割り  
をする。  
ガラオンはアボカドまたはマホガニーの丸  
太にシカヤアライグマの皮を片面に葛と縄で  
張った太鼓で、小片の丸棒で皮を張った縄を  
絞ることによって調律される。  
高音ガラオンには薄いメスのシカ皮やアラ  
イグマの皮が使われ、太鼓の皮の表側には打  
音に金属の振動音を加えるため針金が張られ  
る。低音ガラオンはオスのシカ皮が使われ、  
高音ガラオンより一回り大きく、風糸よりさ  
らに太い木綿の糸が皮の表面に張られる。  
ひとりの奏者につきひとつの太鼓を演奏し、  
ガラオンを股間に置き両手のひらで皮面  
を叩く。太鼓ガラオンはガリフナ音楽にとっ  
てもっとも重要な楽器であり、ガリフナの魂  
とされている。  
次に興味深い打楽器として亀甲がある。そ  
れはブグドゥラまたはサンボナゴとよばれ  
木のステイックで甲の裏面を叩く。そして  
基本リズムにアクセントをつけたり、リズム  
間にこまかく装飾を加えたりする。  
この楽器のつくり方はじつにおもしろく、  
生きたカワガメを捕まえ、それを裏返して土  
のなかに生き埋めにし、数カ月間放置する。  
すると地中のアリたちがカメの肉を食べ、次  
に掘りだすときにはきれいに甲だけになっ

# ホンジュラス ガリフナの 旋律

とみた あきら  
富田 晃  
(写真家)

アフリカから連行された人びとと、  
カリブの先住民の出会いのなかから  
生まれたガリフナ族の音楽は、かれ  
らの歴史を物語り、人生を描きだす



奴隷として連れてこられ、  
自由の民として生きた  
——歴史と暮らし  
コロンブスが新世界アメリカを発見する前  
その島には、はるか二万年ほど前に遠くアジ  
アより、ベリング海峽を越えてはるばるや  
つてきた先住民たちが住んでいた。かれらは  
その島をシュルメイとよび、みずからのこと  
を深い悲しみを意味する「カリナゴ」とよん  
でいた。それが現在の「ガリフナ」そして「カ  
リブ」の語源となった。  
一四九二年コロンブスにより新世界アメリ  
カが発見され、ヨーロッパの列強諸国による  
新世界進出がはじまった。当初、ヨーロッ  
パ人たちは現地の先住民を奴隷化し労働力とし  
て使おうとするが、かれらはヨーロッパから  
もちこまれたコレラや天然痘などの疫病に免  
疫をもたず死滅していった。そこで疫病に強  
く体の丈夫なアフリカの黒人が、奴隷として  
大量に新世界に運ばれるようになった。  
いまから三七〇年ほど前の一六二四年、西  
アフリカの奴隷海岸、現在のナイジェリアを  
出港した一隻の奴隷船がカリブ海の東の端  
西インド諸島の東南端を航行中、嵐にあい沈  
没。九死に一生を得た黒人たちは近くの島に  
泳ぎつき、暮らした。この島が現在のセ  
ントビンセント島である。  
こうして西アフリカの村々からばらばらに  
集められた黒人たちは、この島の先住民であ  
るアラワク族とカリブ族の混血の先住民と混  
ざりあいながら、しだいにガリフナ族として  
独自の文化、言語を身につけるようになった。



↑ガラオン職人の工具。丸太をくり抜く大丸ノミ(右から2番目)は職人みずから水道管からつくったものだ

## ガリフナの魂 ガラオン太鼓の製作

製作者 ルーカス・カルデロン  
場所 ラ・セイバ市

ガラオンにはアボカド、マホガニーなどの木材が使われる。このとき、使用したアボカドはすでに老木で果実はつけない。老木は木材がほどよく枯れて材質が安定し、中心に空洞があるため作業の手間がはぶける。樹皮を剥がされ適当な長さで切られた丸太は、数週間乾燥のため放置される。またガラオン職人は作業による木材の急激な乾燥を防ぐため、いくつかのガラオンを並行して作業を進める。斧で外形を整え大丸ノミで内径を削り出す。この作業に三日から一週間費やされる。内側をくり抜かれた丸太の側面には縄をとおすための穴が開けられ、全体に艶がかけられる。



↑太鼓ガラオンには、シカやアライグマの皮が使われる。海の砂を皮に撒き、木片で擦ると、いとも見事に毛を剥ぐことができる



↑毛を剥ぎ、水に浸した皮を、職人は手と足をたくみに使って、藁でつくった環に巻きつけていく  
→太鼓ガラオンの製作にはアボカドやマホガニーの老木を使う。また、作業による急激な木材の乾燥を防ぐため、いくつかのガラオンを並行して作業を進める

太鼓の皮を張るには藁でつくった環がもちいられる。藁の皮を剥ぎ形を整えながら削り、丸く環にして釣り糸でとめる。これをふたつ作る。太鼓の皮にはシカやアライグマの皮が使われる。高音ガラオンには薄めのメスジカの皮やアライグマの皮が使われ、低音ガラオンには、オスジカの皮が使われる。皮をガラオンに張る作業は日中は避け、暗くなり始めてから始められる。それは、ガラオンは夜なかに演奏されることがおおく、日中、皮を張ったガラオンは夜になると皮全体の張りを失ってしまうからである。毛のついた皮の上に砂が撒かれ、それを木片で擦るといとも見事に毛が剥がされる。それを三〇分ほど水に浸し、藁の環に巻き、もうひとつの藁の環とともに縄で胴体と結びつけ強く張られる。一晩乾燥させたあと、高音ガラオンには細めの針金、低音ガラオンには木綿の紐が皮面に張られ、打音に振動音を混ぜられる。



↑太鼓の胴と皮を巻いた藁の環は縄で結ばれている。藁の環を叩いたり、縄を木片で絞ることにより皮を張っていく。この作業は日中は避け、暗くなってから始められる。それは太鼓ガラオンは夜なかに演奏されることがおおく、日中、皮を張ったガラオンは、夜になると皮の張りを失って響かないからである

←太鼓を一晩、乾燥したあと、皮の表面に針金を張り、打音に金属の振動音を加える



↑亀甲もガリフナの重要な楽器のひとつ。一般的には亀甲を片手にもち、それを反対の手にもった木のスティックで打ち鳴らす。写真のように大きささまざまな亀甲を木琴のように並べ、それぞれの音色を楽しめるようにしたのもある

↑響きわたるホラガイの吹奏は音楽を盛りあげ、ガリフナたちを高揚させる



拍子木は黒檀や紫檀などの堅木が使われ、音楽的には亀甲とだいたいおなじ役割りをする。吹奏楽器であるホラガイは日本の山伏のものとおなじように演奏される。基本音とその一オクターブ上の音をだすことができ、曲の間奏として演奏されることがおおい。この楽器をつくるには生きたホラガイが使われる。それは死んだホラガイの殻では側面に穴があいていて息がもれてしまうからである。海からす潜りて捕ったホラガイは、殻ごと茹でられ身はスूपにして食べる。そして残った殻の先端に鋸で穴を開け、それをトランペットのように口にあて、唇の振動により音をだす。マラカスは一般のラテン音楽に使われるものよりもひとまわり大きく、音にも重量感が

ある。本体になるヒッコリーの実は握り拳よりひとまわり大きい固い殻をもち、それに米粒大の草の実を入れ、木の握りがつけられるふたつ一組として使いジャンジャンと基本リズムのベースとして演奏される。次に、ガリフナの村々につたわる各種行事を、音楽と踊りとともに紹介してみよう。**フンタ**——**弔い** セントビンセント島からホンジュラスへの一カ月におよぶ苦難の航海の途中、五八〇〇人ほどいたガリフナのうち一〇〇〇人ほどが死んだ。かれらは仲間が死ぬと手拍子でリズムをとり船上でその死を弔った。ガリフナの村では人が死ぬと、葬儀はキリスト教カトリックのしきたりにならない。自宅で家族親類と過ごす通夜をしたのち、教会で別れのミサをおこない、村の一角にある墓場

クリオウのリズムと踊りはブンタと似ているが、さらに動的でそしてエロティックである。男女が一列に並んで円をつくり、腰を激しく左右に振りつづける。この踊りでは、踊り手たちがひとりずつ交代で太鼓ガラオンに近づき、奏者の目を見つめながら腰をさらに激しく揺らす。そして双方の興奮が絶頂にたつと、それまでの継続していたリズム進行

**クリオウ——欲情**  
死者への弔い、ブンタが進むにつれ人びとの興奮は高まり、それは色情をとまらぬ歌と踊り「クリオウ」(欲情)へと変わる。つまりひとつの死は新たな生をよび起こすのである。

クリオウの死後数カ月から一年ほどたつておこなわれる。その間、家族は遠くにいる親類をよび寄せ、金を蓄え食事や酒を準備する。そしてブンタ当日は友人や村の人びとを死者が住んでいた家に招き一晩じゅう踊り明かす。その踊りは両足をひろげ、つま先立ちに立ち、みずからの肉休からその魂をしばらくだすごとく、身を震るわせるものである。ブンタの起源は、楽器をもたなかった船上での手拍子による弔いに由来することから、ブンタの演奏は楽器を使わず単純な手拍子と歌だけのものが基本であるが、最近では太鼓、亀甲、ホラガイなどの楽器をもちいたものもある。

ブンタとは現世をまっとうし苦しみを解放された死者が、来世での永久の復活を祝う儀式である。だからブンタは悲しい子どもの死にはおこなわれない。ブンタは準備される。

に土葬される。当然、死は家族親類をして村の人たちにとって悲しく辛いことであり、葬儀はおおくの涙のなかでおこなわれる。しかし葬儀が終わると残された家族親類たちにより「ブンタ」が準備される。



**クリオウ**  
クリオウは欲情をあらわすリズムと踊りだ。踊り手たちはひとりづつ前に出て、太鼓ガラオンに近づき腰を激しく揺らす

4-144 C♯

独奏ガラオン	内外		etc.
1stガラオン	内外		similar ~
2ndガラオン	内外		similar ~
亀甲			similar ~
マラカス			similar ~



4-120 C♯

独奏ガラオン	内外		etc.
1stガラオン	内外		similar ~
2ndガラオン	内外		similar ~
亀甲			similar ~
マラカス			similar ~

**バランダ、ウング・ウング**  
踊り手と太鼓奏者の興奮が頂点になると、それまでの継続していたリズム進行は突然うち破られる。太鼓ガラオンはリズムを停止する強い打音を響かせ、踊り手は引いた腰を強く前に打ちだすのだ。それは性的興奮とも重なるエクスタシーだ



4-63 C♯

独奏ガラオン	内外		etc.
1stガラオン	内外		etc.
2ndガラオン	内外		similar ~
マラカス			similar ~

一日曜の夜、村の集会所では友情と連帯の証しウング・ウングが踊りあかされる  
12月25日、婦人たちは、喜びを表現するバランダを踊りながら村じゅうを練り歩く



**リズム譜 凡例**  
独奏ガラオン 即興・独奏する高音太鼓  
1stガラオン 基本リズムを奏でる高音太鼓  
2ndガラオン 基本音に低音でアクセントをつける低音太鼓  
内 太鼓ガラオンの中心近くを叩いた振動音  
外 太鼓ガラオンの端を叩いた乾いた高音  
亀甲 木のスティックで叩かれる  
マラカス ふたつ一組で演奏される  
etc など  
similar~ 同様

# クリスマス 到来を告げる 使者ワリニ

ガリフナたちは先祖の霊や神など超自然的なものに敬虔の念をもち、それが普段の生活や仕事、各種行事、儀式、祭りなどにあらわれている。現在、ガリフナのおおくは敬虔なクリスチャンであるが、その信仰はキリスト教カトリックとアフリカ、カリブからもちこんだ土着信仰とを習合させたものである。

クリスマスはガリフナの一年でもっとも重要な日である。二月二四日の夜、村の集会所では、ウング・ウング（友情）や「パランダ」（喜び）が踊られ、人びとは歓喜に満たされる。午前零時がくると人びとはみな抱きあって喜びをあらわす。そして二拍子のパランダはそのまゝ進行曲となり、太鼓をかついだ楽士たちとともに歌い踊りながら、村の教会にクリスマスのミサへと向かう。

翌二五日になると、村の女の子たちはお揃いで可愛く着飾って、讃美歌を歌いながら家々をまわる。「パストーレス」をおこなう。

このクリスマスの時期、村には突然「インディオ・バルバロ」（あきれたインディオ）とよばれるひょうきん者があらわれ、こどもたちの人気をさらっていく。また村のあちこちには、「ワナラグア」（戦い―仮面舞踏）がでて、精悍な少年たちの踊りが観られる。

そんな楽しいクリスマスが近づくと、ワリニが祭りの季節の到来を知らせる行事としておこなわれる。ワリニとは自然の恵みをつかさどる神のことで、バナナヤシの姿をしている。



ワリニを演じる者が村の男たちのなかで密かに決められ、かれは数人の男たちを引き連れ、村をでて近くの山にこもる。そして体じゅうにバナナヤシの葉をつけて、それをロープで巻きつける。そして誰がワリニに扮しているのかわからないようにする。そのロープは五、六メートル、ワリニから伸ばされ村の男たちがつかむ。つまり天から地上に落ちてしまった自然の神ワリニは狂暴なところがある。村の男たちに捕まってしまうというのである。

こうしてロープで縛られたワリニは村じゅうを引き回され、村の子どもたちはなにするこのないワリニをからかいながらついていくのである。



## パストーレス ―かわいい聖歌隊

12月25日のクリスマスの日、女の子たちはかわいいお揃いで着飾って、讃美歌を歌いながら家々を回る。村ごとにお揃いの水玉や花柄のワンピースを着た村じゅうの女の子たちは、お母さんにこまかく三つ編してもらった頭には、色鮮やかなアイスクリームや飛行機などの形の髪飾りをいっぱい着け、手には色とりどりの紙テープと鈴で飾った杖をもち、それをシャンジャンと鳴らしながら、キリスト誕生を祝う讃美歌を歌う。そして少女たちに讃美歌を歌ってもらったそれぞれの家ではお礼に飴やお菓子が配られる。



## インディオ・バルバロ ―あきれたインディオ

セントビンセントからやってきた新参者ガリフナは、海岸沿いに小さな村をつくりマニオクイモを栽培し、海で魚をとる暮らしを始めた。ガリフナたちはときおり山から降りてくるインディオたちと小競り合いを起し、かれらのことを山の野蠻者といひ毛嫌いだ。いまでもガリフナの村をたずねると、山から降りてきた貧しいインディオが安酒を求め、村を徘徊する姿がみられる。

「インディオ・バルバロ」とは、村の少年が嫌われ者インディオに化け、人びとを脅かして回る行事である。12月のクリスマスから正月にかけて、インディオ・バルバロは突然あらわれる。ヤシの枯れ葉の腰巻を身につけたインディオ・バルバロは何もしやべらない。そして体じゅうに泥を混ぜた油を塗り、弓矢をもち人びとを脅かす。ときには村をとおるバスにまで乗りこみ旅びとを襲う。そして小銭や飴玉など何か与えないとその汚れた体を擦り寄せてくるのだ。このインディオ・バルバロも、子どもたちの楽しいクリスマスの行事のひとつだ。集めた飴玉はあとで仲良くわけられ、小銭は子供会の会費として、遠足などに使われる。

## グンチエイ

←結婚式など特別な祝日に開かれるグンチエイは、フランス文化の影響を残す優雅な社交舞踏だ

♩-116 6/8

独奏  
ガラオン

1st  
ガラオン

2nd  
ガラオン



## ワナラグア

→ワナラグアとはガリフナの自由と尊敬をまもるため、白人女性に化け、イギリス人たちと戦った先祖たちを誇る行事だ。村の少年たちはクリスマスから正月にかけてスカートををはき、派手な色のブラウスを着て、金網でつくった色白の仮面をつけ、家々をたずね、踊りまわる



♩-176 6/8

Intro.

2nd  
ガラオン

独奏  
ガラオン

2nd  
ガラオン

↑踊り手の少年たちはイリアアウという、楽器と装飾をかねた数百の貝殻を腰にあて、長老たちが即興で叩く太鼓にあわせ跳びはねる

→この仮面舞踏では、少年たちの衣装の美しさと踊りの技が競われる。そして村びとたちはうまく踊った少年にお金を投げ、太鼓奏者に酒を振る舞う



を突然うち破る強い打音とともに踊り手は引いた腰の前に打ちだす。それは性的興奮とも重なるエクスタシーだ。

**ウング・ウングとパランダ**―友情と喜び

友情と連帯を示す「ウング・ウング」。そして喜びをあらわす「パランダ」は、婦人たちにより踊られる。ガリフナの村では、日曜日や誕生日の娯楽としてウング・ウング、パランダを楽しむ社交会が開かれる。村の集会所に集まった婦人たちは向き合うリーダーの掛け声と動きに合わせて、隊列を組み、体全体をいっせいに左右に揺らしながら踊り明かす。

八分の六拍子のウング・ウングはその三拍

で右、次の三拍で左と比較的ゆっくり踊られる。そしてリーダーとみなとが掛け合いて短い旋律をバリエーションを加えながらくり返し歌う。人びとはゆったりとしたウング・ウングのリズムにあわせ体を揺らすうちに、友情と連帯の快感を高めていく。

そしてウング・ウングは太鼓の合図によるリズムの変化とともに喜びをあらわすパランダへと変わる。パランダは歩く速さとはばおなじテンポの二拍子でウング・ウングよりひとまわり速い。そしてウング・ウングとおなじように体全体を左右に揺らし踊りつづけ、人びとは歓喜に興奮し奇声をあげる。

**グンチエイ**―社交舞踏

グンチエイとは、ガリフナのセントビンセント時代におけるフランス文化の影響をのこす行事のひとつで、クリスマスや村祭り、結婚式などの特別な祝祭日に、正装した男女が一組になり、互いに手や腰を取り合って踊る社交舞踏である。それにはワルツやポレロなどのヨーロッパ宮廷舞踏に通じる優雅さがある。リズムは二小節ごとに一瞬リズムが停止するブレイクがはいる、比較的ゆつくりとした二拍子である。

**ワナラグア**―戦い（仮面舞踏）

いまから二百数十年前、ガリフナたちはイギリス人植民者たちと、西インド諸島のセントビンセント島に住み、たび重なるイギリス人による嫌がらせに怒りを積もらせていた。

ある朝、ガリフナの酋長サトウエの妻が丹精こめて育てたマニオクイモ畑が、イギリス人に荒らされていた。それでも決起しようとしていないサトウエに苛立った妻は「あんたが戦わないなら、わたしが戦う」といい、サトウエのズボンを剥ぎ取りそれをはき、自分のスカートをサトウエにはかせた。こうしてガリフナとイギリス人植民者の第一次カリブ戦争

ガリフナの食べものはバナナ、ココナツ、魚そしてマニオクイモ。巨大なヘビのようにヤシの葉を編んだものにすりおろしたマニオクイモをいれ女性たちが座り水分を抜く。そして、その粉を鉄板で焼き、せんべい状の主食カッサベをつくる



いまから370年前、アフリカを出た黒人たちは、途中カリブの先住民インディオと混ざり合い、現在、中央アメリカ、ホンジュラスのカリブ沿岸に点々と村をつくり住んでいる



が始まった。

そして酋長サトウエをはじめガリフナの男たちは白人女性に化け敵をさがむくため、スカートをばき仮面をつけて戦った。これが「ワナラグア」(戦い)仮面舞踏の起源といわれている。

このときガリフナは、カリブにおけるイギリスの敵国フランスと組み、戦いを優位に進め二七三年の停戦調停で、島内にガリフナの安全と自由を保証した。ガリフナ自治区が設けられた。つまりワナラグアとはガリフナの自由と尊厳のために戦った英雄サトウエと先祖たちを誇る行事なのである。

現在でもガリフナの村々では、クリスマスから正月にかけて少年たちがスカートをばき、派手な色のブラウスを着て、金網をつくった色白の仮面をつけ家々をたずねワナラグアを踊る。踊り手の少年たちはイリアウという、

現在、ガリフナの社会では貨幣経済の流入により、現金収入をもとめ、村を離れいく男たちがおおい。この曲は都会の喧嘩に疲れたひとりのガリフナがふるさとをなつかしむ姿があらわされている。

ガリフナ以外のホンジュラスの人たちにとってもガリフナ文化のゆたかき、とくにガリフナ音楽は国の象徴としてとらえられている。一九七六年にはホンジュラス政府文化観光省により国立ガリフナ舞踏団が設立され、国を代表する文化使節として国際的な活躍をつづけている。また国立以外にもおおくのガリフナたちによるグループがあり、今年一月にはガリフナ音楽舞踏グループ「リタリラン」(ニワトリの血)による日本公演やCDの発売も計画されている。

またホンジュラスでもっともポピュラーな音楽は、メレンゲというテンポの速いカリブ系のダンス音楽であるが、メスティーン(インディオと白人の混血)たちによるおおくのメレンゲ・バンドは、ガリフナ音楽のプンタやクリオウなどのリズムや歌をして踊りを融合し数々のヒット曲を生みだし、ガリフナ音楽はホンジュラスの大衆文化としても息づいている。

数奇な運命のもとホンジュラスにやってきたガリフナ。怒り、苦しみ、喜び、欲情、生と死……靈魂の叫びを響きわたる太鼓とともに歌と踊りに昇華させるかれらはいま、貧困そして差別といった世界の途上国、そして黒人がもつ悲しい現実のなかにたたき込まれている。一九八九年からホンジュラスに住みかかれらと友、兄弟として交流してきたわたしは、ガリフナたちが民族としてのアイデンティティを守り、その伝統と誇りを未来への遺産として残し発展させていくことをこころから願う。

ガリフナの人たちは歌と踊りが大好き。この日、わたしの訪村に集まった人たちは、太鼓がわりに桶と机を叩いて、いつまでも歌い踊りつづけていた



楽器と装飾をかねた数百の貝殻を膝にあて、長老たちが叩く太鼓に合わせ跳びはねる。それは低音ガラオンのかなり速い基本リズムをベースに、少年の踊りと独奏ガラオンの即興的掛け合いによる動きの激しい舞踏とリズムである。また村びとたちはうまく踊った少年にお金を投げ、長老たちに酒を振る舞う。こうしてガリフナの村では民族の歴史を伝統行事として残し、次世代に語り継いでいるのだ。

### 生活のなかの音楽、音楽のなかの暮らし

#### 民謡と心象風景

ガリフナの村々にはじつにおおくの民謡が伝えられている。それはガリフナの人びとが先祖や神、自然に対して深い

民謡の歌詞からガリフナたちの心象世界をさぐってみた。

ココロギが鳴いてるよ  
川辺から聞こえるね  
ああおもしろい  
まだココロギが鳴いてるね  
ああもう聞き飽きた

タガラ・イリル(ココロギの歌)  
このユーモアあふれるわらべうたは、ふたりの子どもが歌いながら単純な手拍子の掛け合いをする遊びの歌である。

眠っておくれかわいジタ  
目覚めないでおくれ  
姉さんとい子でいるんだよ  
ママは山に食べ物を探しにいくからね  
ママが帰ってきたよ  
ほら、あそこにも見えるでしょ  
いっぱいバナナを抱えてきたよ  
甘いサトウキビももってるよ

美しい旋律をもつこの子守歌は、途中で歌い手が赤ちゃんの母親から姉へと変わり、ガリフナの女性たちが子守り、家事、畑仕事と忙しく生きる姿を映しだしている。

なんて悲しいんだらう  
太陽が沈んでいく  
なんて美しいんだらう  
月が昇っていく  
ふるさとに帰らう  
教会のおふだを買って  
黒い聖母に  
いままでの放蕩を謝るんだ

サンドウ・ブリテイ(黒い聖母)  
ここでは、村々に伝わる

### ジタ(ガリフナの子守歌)

リズム: バランタ

YI TA — YU DEI GUA NYA JA BA O  
ジタ — ユタイグアニヤハバオ

AY MAR GA RI TA YU DEI GA NYA JA BA TA BU BA MU LE LU AA O  
アイマルガリタユタイグアニヤハバタブバムレルアオ

NAI BA MAIN BU O U A LU GA CA TA BA LAO —  
ナイバメインブオウアルガカタバオ

YITA YITA ANUTE MAMA E YITA YITA ANUTE MAMA TABUWEIGA  
ジタジタアヌテママーエジタジタアヌテママータブウエイガ

CHA TA AE LA BU WANI NYE GA NI NYE SE —  
チャタアエラブワニニヤガニニヤセ